

2017年度の試験合格率について

(一社)基礎構造研究会代表理事 杉村義広

2017年度の建築基礎設計士・同士補試験結果(2018年1月21日、3月11日実施)の最終報告が3月26日(月)付けで送られて来た。基礎設計士一次試験の合格者が8名となり、例年より大幅に増えたとの情報が筆者にとって一番の印象に残った。一次試験免除者を含む二次の面接試験受験者9名のうち無事に突破した最終的な合格者は7名、合格率は26.9%となり、高かった昨年度よりさらに高い数値になったということである。とくに合格者のうち2名は建築構造設計者であったという点が高く評価される。

一次試験についてはレベルを下げた訳ではないが、ホームページで公開している過去問をよく勉強されていた受験者が多かったことが何よりも合格者増大の最大の理由であったらしい。また、地盤調査項目の問題の配点を多くしたことも合格率を向上させる要因の一つになったようである。試験の問題が単に〇×を付けるばかりではなく、解答者の考え方を聞くような内容が多くなって来たことは大変喜ばしいことと思っている。基礎の設計は過去に扱ったと類似の案件、例えば、敷地が地盤沈下地帯であるとか、液状化の可能性が高い地域に位置しているとかのケースに出会うことが意外に多く、その繰り返しの経験を重ねることで設計技量を高めるといふ面が色濃く含まれており、過去問をよく勉強することがこの種の修練を積むことに繋がるからである。

しかし、実務上似たような案件であっても問題が全く同一となることはまずないのが基礎設計の一面でもある。“所変われば品変わる”の俚諺があるように、案件ごとに敷地は変わるので地盤の新たな問題に出会うことが常であり、また、難しい地盤条件の敷地であればあるほど解決法も唯一ではなくて複数の手段が考えられ、過去に扱った案件の経験を生かしながらも新たな工夫を加えて対処しなければならないことが多い。地盤の問題は地層構成、微地形条件、周辺環境などいろいろな要素を読み解いて、それらから得られた考えを総合的に組み立てて基礎の設計を行う必要があるからである。

建築基礎設計士補試験の方も合格者は8名で、高い合格率(47.1%)となったとのことである。こちらに関しては、問題のレベル、配点の仕方は例年と変わっていないので、受験者がよく勉強されていたことが高い合格率となった最大の要因と思われる。また、特徴的なのは合格者8名のうち5名が建築構造設計に携わっている方々であるという高い合格率であり、建築基礎設計士、建築基礎設計士補合わせての構造設計者の合格者が増加していることは好ましい限りである(建築基礎設計士の方は当然ながら比率は低くなるが、それでも上記したように2名の合格者があった)。

建築基礎設計士・同士補試験の従来の合格者は、地盤・基礎関係の専門技術者になることを目指している方々であったが、今回のように建築構造設計者の合格者が増加している事実

を見ると、普段はSE (Structural Engineer) として従事しているが、GE (Geotechnical Engineer) としての知識と感性をも高めたいと考える人々が増えつつあることを確認できて喜ばしい気持ちになる。地盤の性質をよく吟味し、それに適合する基礎を造り出すことがいかに大切であるかを講習会などで言い続けて来たことが少しずつ効果を発揮したのかと、自信に満ちて言えるからである。

筆者は、そうした建築構造設計者への支援活動に重点を置くことを条件に当研究会の代表理事を引き受け今年で4年目になるが、今後もその活動を積極的に続ける決意を新たにしていくところである。